僧正の弟子達

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僧正の弟子達

【Ｎコード】
Ｎ０４４５Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
前田慶次は叔父利家に悪戯をした罰で仁智寺に行かされた。そこで彼が僧正と弟子達から学んだことは。前田慶次の意外な一面を書いてみました。

第一章

僧正の弟子達

山城国仁智寺の住職である永正僧正は高徳の僧として有名であった。各地で人々を助け御仏の教えをよく広めていた。だからこそ乱世においても彼を襲う者はいなかった。

僧正には弟子達がいた。六人いたがその誰もが異形の姿をしていた。人々はその弟子達を見て誰もが最初は恐れるのであった。

しかし彼等もまた高徳の僧達であり話してみれば立派な者達であった。その立派な様子から最初は恐れていた人々も何時しか彼等も慕うようになっていた。彼等はそれぞれこういう名であった。

異様に身体が大きく肩の盛り上がった僧を永久という。

顔が化け物の様に細長い大男は永全という。

子供そのままに小さい僧侶は永光という。

足が異様に長い男は永明という。

手が長過ぎる僧は永遠という。

最後の白子を永生という。皆異形の存在であった。少なくとも他の人とは姿形が全く異なっていた。

しかし彼等が高僧であるということは誰も疑わなかった。最初は信じなくとも彼等と会って話をすればそれが謝りであるとわかったからだ。

その彼等のことを知りたく思い寺に来た者がいた。織田家の者で名前を前田慶次という。織田家だけでなく天下に名を知られた武辺者である。

彼は所謂『傾奇者』でありその奇抜で派手な服装でも知られていた。寺に来る時も異常に大きな黒馬に乗り赤い毛皮に黄色の袴、背中にはやけに大きな太刀を二本も背負い口には煙管がある。一目見たら忘れられない格好をした大男の美丈夫であった。

彼のこの傾奇者ぶりは叔父も同じである。彼の叔父である前田利

家もまた派手な格好を好む武辺者であり織田家においてはそれで有名になっている。そうした意味でこの叔父と甥は似た者同士であった。またこの似た者同士というのが問題になっていたのである。
「おや、慶次様」
寺に行く途中に供の者が慶次の顔を見上げてあることに気付いた。
「左目の辺りが」
「ああ、これはな」
馬に乗る慶次は供の者に応えて破顔しながら答えてきた。
「叔父御とな。ちょっと」
「またですか」
「そうじゃ、またじゃ」
彼は顔を崩して笑い続ける。
「氷の風呂を馳走してやったら怒ること怒ること」
「また悪戯ですか」
「ほんの些細なことじゃ」
彼にしてはそうである。この叔父と甥はとかく衝突することが多かったのだ。何しろ傾奇者同士だ。何かにつけて張り合ってきているのである。
「じゃがそれで怒ってのう。こういう有様じゃ」
「それは怒りましょう」
伴の者は慶次ではなく利家の方に軍配をあげた。
「そのようなものに入れられては」
「あれじゃぞ」
慶次は笑いながらまた言う。
「風呂から飛び出て来て真っ先にわしのところに飛んで来たのじゃ」
「風呂場からですか」
「左様、褌一枚でじゃ」
そしてそのまま喧嘩になったというわけである。
「後はそれで」
「その左目ですか」

「わしは右目じゃった」
何だかんだで喧嘩を受けて立ったのである。
「大人げないからのう。叔父なのに」
「いえ、誰でも怒りますよ」
伴の者の言葉はここでも慶次にとって容赦がないものであった。
「そんなことをされれば。しかも何度目ですか？」
「確か五度目じゃ」
慶次も悪びれたところはない。
「まあよくやる悪戯の一つじゃな」
「全く。懲りておられないのですか」
「傾くには懲りるのは無縁じゃ」
また笑って答える。
「それで傾いておられるか。しかしじゃ」
「しかし？」
ここで慶次の言葉が少し変わった。
「叔父御はやっぱり強い」
「やはりそうですか」
「流石は槍の又左じゃ」
利家の通称である。織田家においては名うての武辺者の一人だ。
後に天下人である豊臣秀吉と対しても全く臆するところがなかった。
まさに豪傑と呼ぶに相応しい男なのだ。
「効いたぞ」
「それ程ですか」
「拳一発で槍程の威力があったわ」
これは大袈裟ではない。
「全く。力一杯殴ってくれたわ」
「それは慶次様だからですよ」
伴の者はそこまで聞いてこう彼に答えるのであった。
「わしだからか」
「そう。天下きっての傾奇者である前田慶次様だからですよ」

ここにきてようやく彼を褒めだしてきた。
「本気でかかられるのは。では御聞きしますが」
「うむ」
慶次は馬上から伴の者の言葉を聞いた。
「慶次様も利家様には本気で相手をされますね」
「当然じゃ。叔父御は強い」
互いの力量をはっきりとわかっていたからこその言葉であった。
「本気でかからねばわしも怪我をするわ」
「そういうことです。利家様もそれがわかっておられるのです」
「左様か」
「左様です。言うならば御二人は」
「そこから先はわかっているぞ」
笑って彼に告げた。
「似た者同士と言いたいのじゃな」
「はい、その通りです」
伴の者もはっきりと答えてみせた。またしても。
「叔父と甥で。よくもまあ」
「まあそうじゃな。わしもそれは否定できぬ」
外見は似ていない。しかし性格は本当に似ていたのだ。
「しかもじゃ」
「しかも？」
「悪い気もせぬ」
それも自分で認めた。
「言われてもな」
「それはよいことです」
「そうじゃな。それでじゃ」
「はい」
話は変わった。
「その叔父御から言われてのう。この度は」
「仁智寺のことですか」

「そうじゃ。頭を冷やしてこいと」
そう言われてのことであったのだ。そうでなければ今日は都の遊郭で派手に遊ぶつもりであったのだ。戦のない時はいつもそうしているのである。
「全く。きつい叔父御じゃ」
「それで済んでよかったのでは？」
「よいのか」
「だってそうですよ」
伴の者はまた言うのであった。
「じゃあ御聞きしますけれど」
「うむ」
「これを柴田様にやったらどうなりますか？」
「権六殿か」
織田家の筆頭家老柴田勝家のことである。織田家において最も攻めが上手いと言われ謹厳実直にして生真面目な人物である。慶次や利家にとっては口煩い頑固親父だ。
「そうです。どうなりますか？」
「まず一発思い切り殴り飛ばされるな」
これは実に安易に想像できた。

第二章

「そのうえでじゃ」
「その後でお説教ですよね」
「口煩い御仁じゃからのう」
顔を見上げて考えている。上には空が広がっている。
「何処まで怒られるから」
「それでその後で罰として何かどえらいことが」
「やるじゃろうのう。そこまで」
「けれど利家様は寺に言って話を聞いてこいとだけ」
確かに随分違う。
「全然いいじゃないですか」
「そう考えればいいか」
「そういうことです。それに仁智寺ですよ」
今から行く寺のことが話された。
「立派な方々がおられる場所です。是非行かれるべきです」
「それもそうか。ここで遊郭に馬を進めたらどうなるかのう」
「それこそ槍が来ますね」
槍の又左の槍がである。
「どっちがいいですか？」
「一度叔父御と本気で槍を交えるのも面白いかものう」
顎に手をやってとんでもないことを言い出してきた。
「さてさて、どうなるやら」
「またそんなことを仰る」
わかっているとはいえ呆れずにはいられない言葉であった。
「命知らずなんだから」
「人の命なぞ短いものよ」
これは慶次がいつも考えていることであった。だから後悔はしない。こうも考えている。これは彼だけではなくこの時代のいくさ人

の多くが考えていることである。
「それでじたばたしても仕方あるまい」
「そうですけれどね。けれどまあここは」
「わかっておる。茶を飲むのもいいものじゃ」
寺といえば茶である。この頃茶は本格的に広まりだしていた。信長がそれにかなりの貢献をしている。恩賞として茶器を与えることが戦国時代においては広まっており信長はそれを大いに活用すると共に己の武将達に茶道を勧めたのである。ただの武辺者にしか過ぎなかった者達も次第に文化を解するようになった。と言うと如何にも武士達が文化を知らなかったように思えるが実際はそれこそ平安の頃から武士もまたかなりの教養を持つ者が多かったのでこれは当てはまらない。この慶次にしろ中々の風流人でもある。茶もかなり好きなのである。
「さてさて。叔父御と飲む茶はいつも菓子の取り合いじゃが」
「おまつ様も大変ですね」
その利家の正室である。槍の又左の女房だけあって肝っ玉が滅法強い。慶次ですら怒られてしまうこともある程である。
「御二人の間ですと」
「まつ殿の方が凄いぞ」
しかし慶次はこう言い返す。
「わしも叔父御も茶釜で殴られるのじゃからな」
「茶釜でですか」
「いや、ねね殿も凄いが」
秀吉の妻だ。彼女も肝っ玉が凄いので有名であった。
「まつ殿も。凄いものじゃ」
「尾張の女は強うございますな」
「男は弱いがな」
尾張兵と言えば弱兵である。そう評判になっているのだ。
「おなごは確かに強いのう」
「仁智寺には尼はいないそうで」

「わしは尼には興味はないぞ」
苦笑いを浮かべて伴の者の言葉に返す。
「言っておくがな」
「そうですか。ほら、あれこれ言っているうちに」
「むっ」
質素だが大きな外観の寺が見えてきた。平地の上にあり建物の左手には大きな鐘が見える。そこに一人の僧がいた。
「あそこですね」
「そうじゃな。あれは」
慶次は鐘のところにいる僧を見た。そうして言うのであった。
「永明殿じゃな」
「おわかりになられるのですか」
「話では永明殿は腕が長かったな」
「はい」
仁智寺にいる僧達はいずれも身体は異形である。慶次もそれを知っているのだ。
「その通りですが」
「では間違いない。あそこにおられるのは永明殿だ」
「よく見えますね」
「いくさばにおいては目もまた大事じゃからな」
笑ってこう答えた。
「これには自信があるぞ」
「それはいいことです。では」
「うむ。茶を楽しもうぞ」
「いえ、そうではなく」
また慶次の言葉に慌てて突っ込みを入れる。
「お話を御聞きしましょう」
「わかっておる。ほんの冗談じゃ」
「慶次様の冗談は度が過ぎています」
それは否定できなかった。そのせいで今こうしてその仁智寺に向

かってもいるからだ。
「ですから時として冗談に聞こえないのです」
「まあ気にするな。さて」
寺の門のところで馬を止める。大柄な慶次から見ても実に大きな門である。
「参るか」
「はい」
何はともあれ寺に着いた。入り口のところで馬を止め中に入る。
そこで寺の者を呼ぶのであった。

第三章

「頼もう」
「どなた様ですか？」
「織田家の前田慶次でござる」
堂々と自身の名を名乗った。
「えっ、あの」
寺の中から驚きの声があがった。
「前田様ですか」
「そうじゃ。わしじゃ」
「あの、ここには酒も女もありませぬが。当然武芸者も」
「待て待て」
寺の中からの言葉に思わず苦笑いになる。
「わしとて何もいつも遊んでいるわけではないぞ」
「茶と菓子ならありますが」
「おうよ、それを所望じゃ」
「ちょっと慶次様」
また悪ふざけをはじめた慶次を供の者が嗜める。
「ですからそれは」
「わかっておるわ。実は今のは冗談じゃ」
「そうでしたか」
「うむ。実はのう」
「はい」
「何用でしょうか」
声が複数になった。すると寺の中から六人の僧達が出て来たのであった。僧正の六人の弟子達である。それぞれ異形の姿を法衣に包んでいた。
「むっ、その方達だけか」
「はい、そうです」

彼等を代表して白子の永生が答えてきた。
「僧正様は今用事で寺を空けておられます。私達が留守番です」
「そうであったか。これは残念」
「僧正様に何か御用で」
「実はな。話を聞きたいと思ってな」
そう永生に答えた。
「僧正殿にな」
「そうだったのですか」
「なら仕方がない」
慶次の屈託のない笑いはここでも変わらない。
「御主等に話を聞くとしよう」
「私共にですか」
「左様、それでよいか」
そう永生に問うのであった。
「六人おったと思うが皆おるか」
「ええ。それは」
永遠生きるは静かに彼に答えてきた。
「皆揃っております」
「ならよい。では一杯やりながら」
「あのですね」
永生は酒という言葉には眉を少し顰めさせてきた。
「ここは寺ですので。酒は」
「何じゃ、真面目じゃのう」
慶次はそう言われて感心半分残念半分の顔を見せたのであった。
「坊さんも結構飲むものじゃがな」
「少なくともこの寺ではそうではありません」
永生は真面目な顔のままで答えてきたのだった。
「それは御了承下さい」
「わかった。では真面目な話をしようぞ」
「ええ。それではこちらへ」

寺の茶の間に案内される。供の者も一緒だ。茶の間は質素で穏やかな内装であった。何も派手なところはない。畳も白くその風情を際立たせている。中央の茶釜は黒く使い込んでいる感じがしている。慶次はその茶の間の中においてその供の者と並んで正座して待っているとやがて間に六人の僧達が狭い入り口から入って来たのであった。静かな物腰で一人ずつ部屋に入って来たのであった。

「お待たせしました」

永生が六人を代表して彼に挨拶をしてきた。

「いえ、全く」

「ではお話しましょう」

「うむ。それでは」

茶と菓子がまず出される。慶次はその茶と菓子を静かな物腰で飲み食いしていく。大柄で派手な外観からは思いも寄らぬ繊細な動きであった。

「結構なお味で」

「お見事です」

その彼の動きを一部始終見ていた永全が言ってきた。

「風流人とは聞いていましたが」

「何、まだ茶の道に入っているところまでも行っておりません」

慶次は穏やかな笑みを浮かべてそう永全に答えてきた。

「風流も。まだまだです」

「まだまだですか」

「その通りです。まだ千殿や長益様の域には」

千利休は言わずと知れた茶道の創設者だ。彼は信長のブレーンでもあり慶次はその関係で彼と知り合っていたのだ。長益とは信長の弟で茶三昧の日々を過ごしていることで知られている。後に有楽斎としての名が知られるようになっていく人物である。

「いえ、中々」

「そうお世辞を言われると困ってしまいます」

慶次は顔を崩して笑ってきた。照れ臭いのである。

「拙者なぞに対して」
「左様ですか」
「ええ。ですからお褒め頂くのはこれ位にされてくれれば」
「わかりました。それではこれで」
「はい」
これで茶の話は終わった。話は本題に入るのであった。
「それでですね」
「お師匠様のことですね」
「そうです」
慶次は永生の言葉に答えた。
「素晴らしい方だとは聞いていますが」
「はい。それは私達が最もよく知っていることです」
今度は永明が答えてきた。
「私は。御覧の通り」
ここで慶次に自分の手を見せる。あまりにも長いその両手を。
「化け物の様に長い手を持っています。この手により化物と言われ蔑まれてきました」
「そうだったのですか」
「生まれてすぐに捨てられ」
「私もです」
永明の隣に座っている永遠が口を開いてきた。
「足の長さを嫌われ親に捨てられ。それからは見世物に出されていました」
「見世物に」
「辛い日々でした」
彼は語る。己の過去を。
「蔑まれ晒われ。石を投げられ棒で打たれることもありました」
「その姿故にですか」
「左様です」
今度は永光が言ってきた。どうやら彼も二人と同じような生い立

ちを経てきているようである。
「私も。行く先々で哂われ化け物だ人ではないと言われてきました」
「人とは。惨いものです」
慶次は表情を消して淡々とした調子で述べるのであった。
「己とは違うものを恐れ蔑み罵る。そうした面もあります」
「その通りです」
永久が答えてきた。今度は彼であった。

第四章

「私達は皆それを幼い頃から味わってきました」
「それが人の全てだと思っていました」
永全も言う。
「人のそうした顔ばかり見てきて」
「世を呪っていました」
最後に永生が語った。
「ですが。どういう運命か」
「この寺に入ったのですか」
「はい。誰もが見世物として客が集められなくなり」
要するに飽きられたということである。それが彼等の運命だったのだ。
「見世物の親父達にも捨てられ彷徨い」
「何時しか。この寺の前に倒れていました」
「我々は全て」
「それが運命なのでしょうか」
「おそらくは」
六人はそう慶次の言葉に答えた。
「そしてこの寺の前に倒れると」
「お師匠様が出て来られたのです」
「僧正殿がですか」
「最初は。こう思いました」
永全が語る。
「また。見世物に出されるのだと」
「しかしそれでも生きられる」
永久の言葉だ。既に彼等は諦めていたのだ。この世の全てのことに。
「そう思い寺に入れられましたが。それは」

「違っていたと」
「はい」
永光はこくりと頷いた。その小さな顔で。
「その通りです。お師匠様は違いました」
「私達に食事を下さり」
今度は永明が語る。
「寺の僧にして下さったのです」
「そして言われたのです」
永遠の言葉が震えていた。その時のことを思い出しているのであろうか。
「あらゆることは運命だと」
「運命ですか」
「そうです」
六人はそう慶次に答えて頷くのであった。彼等の心は同じだったのだ。
「この姿に生まれたのも。そして」
「そして？」
「この寺に来たのも。運命なのだと」
「それは一体」
慶次にはその言葉の意味はわからなかった。それでついついその顔をいぶかしげなものにさせる。こうして見ると実に表情豊かな男であった。
「全ては御仏の御導きだと仰るのです」
永生が述べてきた。
「御仏のですか」
「そうです。私達がこの姿に生まれ御仏の道に入ることが運命なのだと仰るのです」
「運命ですか」
「そうです」
彼等は言うのであった。

「我々のこの姿が」
「そうであるか」
「ふむ、初耳ですな」
慶次は腕を組んでいた。そうして考える顔で述べるのであった。
「そうした話は」
「ですがお師匠様は仰ったのです」
「私達に」
永明と永遠はそれぞれ言うのであった。
「これもまた御仏のお考えだと」
「私達を導かれる為に」
「しかし。あれですよな」
慶次はここで心の中で覚悟を決めてから言ってみせた。これは一種の賭けであったが彼はいくさ人らしくここでは度胸を使うのであった。
「あれだと」
「それは一体」
「つまりです」
そうしてまた六人に答える。
「貴方達はその御姿故に苦労もされてきていますね」
「はい」
「その通りです」
これはもう言うまでもない。六人もそれを隠さない。
「幼い頃から化け物と言われ」
「見世物にされ」
それは確かにおぞましい過去である。しかしその過去を語る言葉も口調も穏やかなものであった。そこには悟ったものすら存在していた。
「そうして生きてきました」
「私達の前半生」
「しかしそれが」

慶次はまた言ってみせた。
「貴方達を仏の道に進ませたというのですか」
「その為にこの寺に辿り着きましたし」
「お師匠様にも御会いできました」
「確かに」
今までの話から慶次もそれには頷くことができるのであった。
「そうなりますな。しかし」
「ええ」
「まだ何か」
「そうした前半生を貴方達が乗り越えられたのはどうしてでしょうか」
彼が今度聞くのはそこであった。
「その辛い生い立ちを乗り越えて。今に至るのは」
「それこそがお師匠様の御教えなのです」
永生が述べてきた。その白い顔に柔和な笑みを浮かべてみせた。
「僧正様のですか」
「そうです。明王や天部ですが」
「はい」
仏の一つである。所謂不動明王や帝釈天である。
「腕が何本もあったり」
「ええ、それは」
それは仏像では普通である。
「異形の姿をしておられますね」
「そうですな、それは確かに」
慶次とて知らない筈がない。俗に三面六臂の活躍という言葉もある程だ。こうした姿も仏像においてはごく有り触れたものであるのだ。
「それと同じであると」
「御仏と同じですか」
「左様です」

六人は穏やかな声で述べてきた。またしても。
「ですから。姿を怖れる必要はないと」
「そう仰ったのです」
永久と永全の言葉であった。
「私達にとってはこれは思いも寄らぬ言葉でした」
永光も言った。
「まるで。渇きの時の雨の様に」
「雨ですか」
その言葉は慶次にもわかった。
「そうです、雨です」
「まさに」
また六人は慶次に語ってきたのであった。
「それにより私達は救われ」
「そうして今に至るのです」
「そうだったのですか」
慶次はそこまで聞いてまた頷いた。彼にとっては今までに聞いたことのない大きな言葉であった。それを聞いて心が晴れやかになるのも感じていた。

第五章

「いや、成程」
「如何でしょうか」
「その御姿に生まれ僧正様に出会われ」
「はい」
「その通りです」
「そしてその僧正様にまた」
慶次の言葉は続く。
「教えて頂き。悟りを開かれ」
「今の私達があるのです」
「全てが御導きだったのです」
「御仏のですな。それではそれがしも」
自分に対して話を当てはめてきた。ここに至って。
「前田殿も」
「一体何が」
「今日ここに来たのも御導きだったのでしょうな」
にこりと笑っていた。大柄なその身体の上に屈託のない無邪気な笑みを浮かべている。それが派手な格好ともやけに似合っていた。
「そうなると」
「おそらくは」
「そうなのでしょう」
六人の僧達も彼のその言葉に頷く。これまでの話の流れではそうなるのが自然であった。
「わかりました。それではですな」
「ええ」
「まだ何か」
「いや、もうこれで充分」
その屈託のない笑みで六人に応えるのであった。

「わかり申した。それではこれで」
「帰られるのですか」
「その通り。では」
立ち上がった。それからの動きは早かった。
忽ちのうちに六人の僧達に別れを告げ寺を後にする。馬に乗り帰路についている彼に対して供の者は問うのであった。
「もうおわかりになられたのですか」
「うむ」
満面に笑みを浮かべて彼の言葉に頷いてみせる。
「存分にな」
「だといいんですがね」
「信じておらぬのか」
慶次は彼が信じていない素振りを見せたのにすぐに気付いた。それで馬上から問うのであった。
「そりゃおわかりになられていればいいですが」
「まあ叔父御にはちゃんと申し上げる」
話の発端のその利家である。
「それでよいな」
「だといいですけれどね」
「まあ柿でも買って帰ろうぞ」
気楽に話を出してきた。ここが慶次らしかった。
「食いながらな。それでよいな」
「はい。まあおわかりなら」
「くどうのう、また」
そうは言いながらも柿を買ってそれを食べながら買える。そうして利家の屋敷に着く。そこには派手な格好をした引き締まった身体つきに精悍な顔立ちをした長身の男が待っていた。この彼こそが槍の又左こと前田利家である。慶次の叔父にして喧嘩相手の男である。
「慶次」
彼は太く大きな声で慶次に対して問うてきた。彼と対峙するよう

にして立っている。
「それで何かわかったか」
「無論でござる」
慶次は不敵に笑って利家に応えるのであった。
「しかと」
「しかとか」
「その通りでござる」
自信に満ちた声であった。それで利家に応えるのであった。
「拙者は嘘は申しませぬ」
「言うたな。それではだ」
利家も慶次のその言葉を受けて笑う。不敵な笑みで。
「見せてみよ。その証拠を」
「ここに」
そう応えて出してきたのは。見れば。
「これでござる」
「むっ！？」
慶次が出してきたのは一枚の紙であった。そこに書かれていたのは。
黒い大きな文字であった。その豪快な筆から慶次の字であることがわかる。そこに書かれている文字とは。
『よくわかりました』
その一文だけであった。利家は最初その文字を見て思わず目が点になった。
「何じゃ、これは」
「その証拠でござる」
慶次は平然としたまま答えてみせる。文字を見せながら。
「拙者があの寺に行き何もわかった証拠でござる」
「これがか」
「左様」
不敵な笑みはここでも変わりはしない。

「叔父御、これで宜しいでござるな」
「うむ」
利家はその言葉を受けてまずは目を閉じた。それからまた言う。
「しかと見た」
「左様でござるか」
「慶次、貴様の言いたいこともな」
「ではこれで宜しいでござるな」
「目を閉じよ」
利家はまた言う。
「よいな。今から」
「目をですか」
「何ならそのままでもよい」
利家の言葉はまだ続く。
「何故ならのう」
「何故なら。褒美を与えて下さるのですな」
「ふざけるでないわ！」
ここで遂に怒りを爆発させた。他ならぬその文字を見てのことである。
「本当に見て来たのか！何じゃその一文は！」
「だから。よくわかり申したと」
「そう見えると思うか！詳細を述べてみよ詳細を！」
「詳細は拙者の頭の中、いえ」
「いえ！？」
「心の中にちゃんとあり申す」
悪びれずに出した言葉であった。
「しかと。この胸に」
「その胸にか」
「その通りでござる」
己の左の親指で誇らしげに胸を指差す。それが何よりの証拠と言わんばかりである。

「ですから。御心配なくでござる」
「そうはいくか！やはりそこになおれ！」
「なおればどうされるのでござるか？」
「一発殴らせるがいい！許せぬ！」
「あいや叔父御、それはまた」
慶次も慶次で悪びれるところは全くない。
「それはまた穏やかではありませんな」
「穏やかでなくともよいわ！覚悟するがいい！」
二人はそこからまた喧嘩になるのであった。その間にまつや慶次の女房が間に入って大騒ぎになる。前田家は今日も大騒ぎであった。
「全く旦那も」
それを遠くの自分の粗末な家で聞いて供の者は呆れて笑うのであった。
「傾くねえ。本当は誰よりも深くわかってるのに」
あえてそれを言わない慶次であった。しかし僧正とその弟子達の心はわかっていた。傾奇者はただそれだけで傾奇男になっているわけではないのである。そこには様々な深いものがあるのである。ただそれを言わないだけであるのであった。前田慶次はそんな男であった。

僧正の弟子達　　完

２００８・２・５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0445e/

僧正の弟子達

2010年10月8日15時04分発行